

ギャラリー 石榴 南青山 二〇二五年九月二日〜十三日・松本 九月二十三日〜十月五日

物は人  
江波戸陽子展

If all time is eternally present

[作家ステイトメント]

もしもあらゆる時がそこにあるなら

—ただそこに在る物たち—

物は喋りません。

ただそこに在るだけ。

それらは、確かに誰かの手にふれられ、使われ、置かれ、忘れられ、あるとき、また誰かに見つけられてきました。

その静かな佇まいに、私は、人の気配を見出します。

過去、現在、未来——

時間はまるで分かたれているかのようであり、  
実は互いに滲み合いながら、ひとところに佇んでいるのかもしれない。

現在の時も過去の時も

たぶん未来の時の中にあり、

また未来の時は過去の時に含まれる。

—T.S. エリオット『四つの四重奏曲』「バート・ノートン」より  
(森山泰夫訳、大修館書店)

かたちにならないもの——

記憶や経験、思い出。

私はそれらを、物を通して描いています。

描くことで、誰かが生きた時間を、そっととどめたいのです。

周囲を見渡せば、絶えず更新されつづける情報ばかり。

動かず、ただそこに在る物を見つめる時間は、

私たちにとっていつのまにか、貴重なものとなっていました。

物には、「流れ去らないこと」でしか伝えられない記憶が宿っています。

日用品、雑貨、楽器、おもちゃ、ぬいぐるみ……

誰かと共にあった物たち。

そして、これから誰かと出会っていく物たち。

それらは私にとって、単なる描く対象ではなく、誰かの時間を記憶しつづける存在です。

— 触れるように描く —

私は、和紙に描いています。

目の前に物を置き、視線でなぞるようにして。

油彩による転写は、パウル・クレーが編み出した技法。

油絵の具を塗った紙を転写紙のように扱い、線を写し取ります。

版画の領域ではありますが、複製は出来ません。

線による構成は、葛飾北斎の教本から学びました。

定規を用いて、物の骨格をとらえ、

見えない構造を紙の上で組み立てていくかのように。

図と余白が呼吸を交わし、人の時間が折り重なってゆくような画面を、私は求めています。

— 今、なぜ絵なのか —

情報が溢れ、手のひらで消費されていく今。

刺激的で感情的な情報がうねりとなって社会に広がるなかで、

沈黙や、物をじっと見つめる時間が、私たちからこぼれていきます。

美術もまた、「没入体験」や「映え」のような一時の波に吞まれ、

その本来の静けさや、物と向き合う行為の深さが見過ごされているように感じます。

絵は、すぐには答えてくれないかもしれませんが。

しかし、ときに沈黙し、ときに遠回りに、

私たちの内側にある「なにかにじっと向き合いたい」という感覚に、

深く静かに、呼応してくれます。

私は絵を描きます。

物の奥にひそむ誰かの時間を、そっとすくい取るようにして。

(江波戸陽子)